

原 著

## A大学看護系学科における新入生と卒業生の 社会人基礎力の比較

古賀雄二\*<sup>1</sup> 石田実知子\*<sup>1</sup> 西田洋子\*<sup>1</sup> 若井和子\*<sup>1</sup>

### 要 約

大学新卒看護職の高い離職率の背景には、医療職者としての基礎的能力のみならず、社会人基礎力が主因となっている。A大学看護系学科の新入生と卒業生の社会人基礎力に関する現状評価を行い、教育的課題を抽出することを研究目的とした。4年生124名、1年生129名に対し、2021年3月および2021年5月に社会人基礎力について調査した。1年生66名（回収率51.2%）、4年生52名（回収率41.9%）分の有効回答票が得られた（有効回答率92.0%）。量的データはMann-WhitneyのU検定を用いて学年間比較を行い、自由記述データは質的帰納的に分析した。その結果、社会人基礎力構成要素のうち、アクションとシンキングに有意差はなく、チームワークのみ有意差（ $p<.04$ ,  $r=.39$ ）が認められた。また、1年生および4年生ともに大学の教育理念に対して社会人基礎力の12要素すべてに関連した思いを有していた。入学時からの教育理念に基づく学問領域（医療福祉）に関する教育が、あらゆる分野の医療人として共通認識を与える基盤的教育となっており、専攻分野（看護）の理解と主体性の形成に影響している可能性が示唆された。

### 1. 緒言

我が国の18歳人口は1992年をピークに減少に転じた<sup>1)</sup>一方で、看護系大学数は2022年時点で約280校と1991年時点と比較すると約25倍になっている<sup>2)</sup>。この現象は、学生にとって入学し易くなった反面、看護基礎教育が求める卒業時の到達度に至らない学生の増加が懸念される。日本看護協会が報告した「2020年 病院看護実態調査」結果では、新卒看護職の離職率は8.6%であり、その推移は2015年以降、横這いを示し続けている<sup>3)</sup>。2019年度に新卒看護師として就職した者は51,808人であり、新卒看護職の退職人数は1,626人になる<sup>4)</sup>。入職1年以内の新卒看護職の離職要因としては、「①基礎教育終了時点の能力と現場で求める能力とのギャップが大きい（76.2%）」など教育・技術面に次いで、「②現代の若者の精神的な未熟さや弱さ（72.6%）」が指摘<sup>5)</sup>されるなど、医療職者としての専門的知識・技術に関する要因に加えて、精神的な成熟に関する要因が指摘されている。

2008年、文部科学省は日本の学士教育課程が共通して目指す学習成果を学士力<sup>6)</sup>として示した。学士力とは、専門知識、基礎知識、基本的人間性・生活習慣に加えて社会人基礎力が含まれた概念<sup>6)</sup>であり、2006年に経済産業省が示した社会人基礎力の概念<sup>7)</sup>を用いて説明されている。

2006年、経済産業省（社会人基礎力に関する研究会）は、「職場や地域社会で活躍する上で必要となる能力」を示した<sup>7,8)</sup>。これは、人間性と基本的な生活習慣（思いやり、公共心、倫理観、基礎的なマナー、身の回りのことを自分でしっかりとやるなど）を基盤として、基礎学力（義務教育課程で修得する読み・書き・算数、基本ITスキルなど）、専門知識（大学や専門学校等の高等教育課程で修得する仕事に必要な知識や資格など）および社会人基礎力が運動して発揮される力である<sup>8)</sup>。それぞれの能力の育成については、小・中学校段階では基礎学力が重視され、高等教育段階では専門知識が重視されるなど、成長段階に応じた対応が必要となるとされ

\*1 川崎医療福祉大学 保健看護学部 保健看護学科  
（連絡先）古賀雄二 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学  
E-mail : y.koga@mw.kawasaki-m.ac.jp

ている<sup>8)</sup>。そして、この中で「社会人基礎力」とは、学生が力量ある社会人に成長してもらうために、学生時代に修得してもらうことを目的として、学生時代に確実に身につけておきたい基礎力として提起されている<sup>7)</sup>。社会人基礎力は3能力・12要素で構成されている<sup>8)</sup>。第一に、前に踏み出す力（アクション）として、①主体性（物事に進んで取り組む力）、②働きかけ力（他人に働きかけ巻き込む力）、③実行力（目的を設定し確実に行動する力）が示されている<sup>7)</sup>。第二に、考え抜く力（シンキング）として、④課題発見力（現状を分析し目的や課題を明らかにする力）、⑤計画力（課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力）、⑥創造力（新しい価値を生み出す力）が示されている<sup>8)</sup>。第三に、チームで働く力（チームワーク）として、⑦発信力（自分の意見を分かりやすく伝える力）、⑧傾聴力（相手の意見を丁寧に聴く力）、⑨柔軟性（意見の違いや立場の違いを理解する力）、⑩状況把握力（自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力）、⑪規律性（社会のルールや人との約束を守る力）、⑫ストレスコントロール力（ストレスの発生源に対応する力）が示されている<sup>8)</sup>。

こうした概念が示された背景として、近年の若者は少子高齢化や核家族化等の生活環境の変化に伴い職場で求められる能力を獲得しないまま社会人となり、スムーズに職場に定着することが困難という、学校から職場への移行の問題があるとされる<sup>9)</sup>。そのため、これまで以上に長くなる。個人の企業・組織・社会との関わりの中で、ライフステージの各段階で活躍し続けるための力としての社会人基礎力<sup>10)</sup>の向上を目指した大学教育の重要性が増してきている。

A大学は「人間（ひと）をつくる、体をつくる、医療福祉学をきわめる」を理念とした医療系の複数学科を有する大学である。また、医科大学、附属病院、また関連施設として総合医療福祉施設等を併せ待ち、入学時よりこれらのネットワークによって、医療・福祉の現場により密着した講義・実習を行っている大学である。加えて、大学全体で担任制度や学生生活委員会などをはじめとした様々な学生生活支援が行われている。さらに、A大学看護系学科は、看護職という対象者の生活を支援する専門職としての教育・学修支援を行い、生活習慣に関する教育を行っている。そうした教育理念に基づくA大学看護系学科の学生への一連の総合的な教育支援が、学生の社会人基礎力にどのような影響を与えているのか、評価がされていない。

そこで本研究はA大学看護系学科学生を対象に入学時および卒業時の社会人基礎力に関する現状評

価を行い、今後の看護職養成に関わる教育的課題を抽出することを目的とした。

用語の定義として、新卒看護職とは、看護師養成課程を卒業して入職1年以内の者とした。大学卒看護職とは、4年制看護課程（大学）を卒業して看護師国家試験受験資格を取得した看護職とした。大学新卒看護職とは、4年制看護課程（大学）を卒業して看護師国家試験受験資格を取得した看護職であり、新規卒業後に入職して1年以内である者とした。

## 2. 方法

### 2.1 研究デザイン

研究デザインは、自記式質問紙による横断研究とした。

なお、本研究はA大学看護系学科における社会人基礎力に関する特徴に焦点を当てるために、リッカート法による質問紙調査を行い、A大学の教育理念に対する自由記述を補完的データとして収集し、社会人基礎力の学年間比較を行う。

### 2.2 調査対象者

本研究は、A大学看護系学科4年生（2020年度卒業生）全員（124名）および同大学1年生（2021年度入学生）全員（129名）を対象とした。

### 2.3 データ収集方法

A大学Microsoft Teams内の看護系学科4年生および1年生の専用Teamを通して、調査協力依頼書と説明動画による研究依頼を行った。また同時に、Microsoft Formsを用いたWeb式質問紙への入力依頼を行った。

### 2.4 調査実施期間

4年生は2021年3月20日～3月末、1年生は2021年5月の2週間とした。

### 2.5 調査内容

#### 2.5.1 基本属性

性別、居住形態（自宅・寮・一人暮らし）、高校卒業後すぐの入学の有無およびアルバイト経験、部活・サークル経験、ボランティア経験の有無を調査した。

#### 2.5.2 社会人基礎力

北島らが経済産業省の社会人基礎力のプログレスシートを基に開発した社会人基礎力を問う36項目から構成される尺度<sup>9)</sup>を採用した。本尺度は看護系大学生を対象に開発され、信頼性・妥当性の検証がされている尺度であり、「全くあてはまらない」「ほとんどあてはまらない」「あまりあてはまらない」「ややあてはまる」「かなりあてはまる」「よくあてはまる」の6件法で回答を求めた。得点範囲は、アクション、シンキングは9～54点、チームワークは18点か

ら108点であり、得点が高いほど社会人基礎力が高いことを示す<sup>11)</sup>。なお、本尺度使用に際して作成者から許可を得た。

### 2.5.3 教育理念に対する自由記述

社会人基礎力について文書・動画による説明を行ったうえで、「人間(ひと)をつくる, 体をつくる, 医療福祉学をきわめる」を理念とするA大学看護系学科に入学したことに対する思いについて記載を求めた。

## 2.6 分析方法

### 2.6.1 基本属性

対象者の学年, 性別, 居住形態(自宅・寮・一人暮らし), 大学入学前の予備校生・浪人経験, 大学入学前の社会人経験, アルバイト経験, 部活・サークル経験, ボランティア経験については単純集計した。

### 2.6.2 社会人基礎力尺度の下位因子であるアクション, シンキング, チームワーク, 生活習慣, 生活習慣意識の1年生(入学時)と4年生(卒業時)の比較

社会人基礎力尺度の下位因子であるアクション, シンキング, チームワークについては個々の合計得点を算出し, 正規性(Kolmogorov-Smirnov検定)を確認した。また, 正規分布の有無により正規分布する場合は平均値と標準偏差(SD)を算出し, 正規分布しない場合は中央値と四分位範囲(IQR)を算出した。また, 社会人基礎力尺度の各下位因の1年生と4年生の比較にあたり, 正規性が認められた場合はt検定を, 認められなかった場合はMann-WhitneyのU検定により比較した。有意水準は5%に設定し, 統計ソフトSPSS Ver25およびHAD Version17.10を用いた。なお, p値と合わせて標準化された指標である効果量(effect size)を同時に算出した。効果量の目安は, rが0.1~0.3未満を効果量小, 0.3~0.5未満を効果量中, 0.5以上を効果量大と判断した<sup>12)</sup>。また, 合わせて検定力分析ソフトウェアG\*Power<sup>13)</sup>を用いて効果量dを0.5, 有意水準を0.05, 検出力をCohenの提唱<sup>14)</sup>により0.80とし, 各検定におけるサンプルサイズを確認した。その結果, 必要なサンプルサイズはt検定の場合は, 両群で各51名, Mann-WhitneyのU検定の場合は

53名であり, 検定にあたり概ねサンプルサイズが適切であることを確認した。

### 2.6.3 教育理念に対する自由記述

社会人基礎力の3能力(12要素)であるアクション(主体性, 働きかけ力, 実行力), シンキング(課題発見力, 計画力, 創造力), チームワーク(発信力, 傾聴力, 柔軟性, 状況把握力, 規律力, ストレスコントロール力)に該当する記述について, 質的帰納的に分析した。分析の全過程において, 2名の研究者間で, 繰り返し分析内容の一致を確認した。また, 分析の妥当性確認のために, 質的研究を専門とする他の研究者により, 分析ワークシートをすべて確認した。

### 2.7 倫理的配慮

調査対象には研究目的, 内容, 手順, 利益, 不利益, 匿名性について質問紙に明記し, 実施時には口頭で説明したうえでアンケートへの協力を求め, 結果公表に際しての匿名性を保証した。また, データは統計学的に処理し, 研究に協力しない場合でも不利益が生じないこと, 成績には一切関係ないこと, 回収したデータは統計学的に処理し研究目的以外に使用しないこと, 調査時の心理的負担を感じたときへの配慮, 調査票の提出をもって研究参加の同意が得られたと判断する旨についても口頭及び書面で説明した。なお, 本研究計画は, 川崎医療福祉大学倫理委員会の承認を得て実施した(承認番号20-097)。また, 申告すべき利益相反はない。

## 3. 結果

### 3.1 有効回答率の結果

同意の得られた4年生52名(回収率41.9%), 1年生66名(回収率51.2%)分のデータを使用した(有効回答率92.0%)。

### 3.2 量的検討

#### 3.2.1 基本属性

高校卒業後すぐの入学, アルバイト経験, 部活・サークル経験, ボランティア経験の有無については, 表1に示した。

##### 3.2.1.1 学年の内訳

学年の内訳は, 4年生52名(41.9%), 1年生66名(51.2%)であった。

表1 対象者の属性

項目	1年生(入学時 n=66)		4年生(卒業時 n=55)	
	有	%	無	%
高校卒業後すぐ入学	65 (98.5)		1 (1.5)	
アルバイト経験	40 (60.6)		26 (39.4)	
部活・サークル経験	66 (100)		0 (0)	
ボランティア経験	59 (89.4)		7 (10.6)	
			41 (78.8)	11 (21.2)

### 3.2.1.2 性別の内訳

1年生は、男性2名(3.0%)、女性64名(97.0%)であり、4年生は、男性4名(7.7%)、女性48名(92.3%)であった。

### 3.2.1.3 居住形態

1年生自宅46名(69.7%)、寮18名(27.3%)、一人暮らし2名(3.0%)であり、4年生は自宅31名(59.6%)、寮18名(34.6%)、一人暮らし3名(5.8%)であった。

### 3.2.1.4 高校卒業後すぐの入学の有無

1年生では有65名(98.5%)、無1名(1.5%)であり、4年生では有46名(88.5%)、否6名(11.5%)であった。

### 3.2.1.5 アルバイト経験の有無

1年生有40名(60.6%)、無26名(39.4%)であり、4年生では有49名(94.2%)、無3名(5.8%)であった。

### 3.2.1.6 部活・サークル経験の有無

1年生有66名(100.0%)、無0名(0%)であり、4年生では有49名(94.2%)、無3名(5.8%)であった。

### 3.2.1.7 ボランティア経験の有無

1年生有59名(89.4%)、無7名(10.6%)であり、4年生では有41名(78.8%)、無11名(21.2%)であった。

### 3.2.2 社会人基礎力尺度の下位因子であるアクション、シンキング、チームワーク、生活習慣、生活習慣意識の1年生(入学時)と4年生(卒業時)の学年間比較

正規性の検定を実施した結果、社会人基礎力尺度の下位因子であるアクション( $p<.09$ )、シンキング( $p<.39$ )、チームワーク( $p<.04$ )と正規性を示

していなかった。1年生の各下位因子の中央値(四分位範囲)は、アクション38.00(35.00-41.25)、シンキング36.00(31.00-41.00)、チームワーク79.50(72.75-90.25)であった。また4年生は、アクションは、38.00(34.25-43.00)、シンキング32.50(30.00-35.00)、チームワーク84.50(77.75-90.00)であった。また、生活習慣( $p>.01$ )、生活習慣意識( $p>.01$ )については正規分布を示していた。

1年生の生活習慣および生活習慣意識の平均値(標準偏差:SD)は、順に18.32(3.72)、6.21(2.03)であった。4年生の生活習慣および生活習慣意識は順に、18.63(3.06)、生活習慣意識は6.31(2.04)であった。

社会人基礎力、生活習慣、生活習慣意識の1年生と4年生の比較では、正規性の検定結果を踏まえ、社会人基礎力の下位因子であるアクション、シンキング、チームワークにおいてMann-WhitneyのU検定(p値)および効果量(r)の算出を行った。その結果、アクション( $p<.70$ ,  $r=.07$ )、シンキング( $p<.79$ ,  $r=.09$ )、チームワーク( $p<.04$ ,  $r=.39$ )であった(表2)。

### 3.3 質的検討(社会人基礎力に関連した教育理念に対する記述内容)

同意の得られた4年生52名、1年生66名のうち、1年生42件(回収率32.6%、有効回答率100%、総文字数2118字、総文章数48)、4年生25件(回収率20.2%、有効回答率100%、総文字数2023字、総文章数39)の記述があった(表3)。

表2 社会人基礎力の1年生と4年生の比較

項目	1年生(n=66)	4年生(n=52)	p値	効果量r
アクション	38.00 (35.00, 41.25)	38.00 (34.25, 43.00)	.701	.068
シンキング	36.00 (31.00, 41.00)	32.50 (30.00, 35.00)	.793	.089
チームワーク	79.50 (72.75, 90.25)	85.50 (77.75, 90.00)	.004	.392

Mann-WhitneyのU検定を用いて群間比較を行った。数値は中央値(四分位範囲)を記載

表3 社会人基礎力に関連した教育理念に対する記述内容

社会人基礎力構成要素	1年生(n=42)		4年生(n=25)		
	件数(複数回答)		件数(複数回答)		
アクション	主体性(物事に進んで取り組む力)	26	62%	11	44%
	働きかけ力(他人に働きかけ巻き込む力)	8	19%	12	48%
	実行力(目的を設定し確実に実行する力)	4	10%	5	20%
シンキング	課題発見力(現状を分析し目的や課題を明らかにする力)	25	60%	11	44%
	計画力(課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力)	14	33%	11	44%
	創造力(新しい価値を生み出す力)	13	31%	3	12%
チームワーク	発信力(自分の意見をわかりやすく伝える力)	6	14%	7	28%
	傾聴力(相手の意見を丁寧に聞く力)	12	29%	10	40%
	柔軟性(意見の違いや立場の違いを理解する力)	8	19%	8	32%
	状況把握力(自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力)	11	26%	14	56%
	規律性(社会のルールや人との約束を守る力)	5	12%	6	24%
ストレスコントロール力(ストレスの発生源に対応する力)	7	17%	9	36%	

### 3.3.1 社会人基礎力に関連した教育理念に対する思いの記述内容（1年生）

社会人基礎力に関連した教育理念に対する記述内容（1年生）を表4に示した。

アクションについては、主体性に関する記述が26件（表3）と最も多かった。【看護だけでなく医療福祉も学んでいく】【恵まれた環境に感謝し医療福祉人として学んでいく】とし、専攻分野（看護）をより広い学問領域（医療福祉）としてとらえて学修することを意識しており、【学業だけでなく生活面でも自分自身に向き合っていく】と日常生活を含めた学生生活全体に取り組む姿勢が示されていた。さらに【患者に寄り添う専門的な看護、責任を果たせる看護を志望して大学を選んだ】とし、教育理念への思いが専攻分野への学習意欲と大学選定理由に影響していた。働きかけ力では、【実習・グループ活動を通して看護師としてだけでなく、人として成長していく】【医療系総合大学なので他学科との学びの交流をしていく】とし、学科内だけでなく医療系の複数学科を有する学修環境を横断的に活用しよう意識しており、さらには【日常生活の中での人との

かかわりを大切にして視野を広げていく】として、正課・課外活動ともに、あらゆる人的環境を積極的に学修および成長の機会ととらえていた。実行力については、【勉強以前に自身の生活を整えた学生生活を送る】と日常生活の安定を学業の前提としてとらえていた。

シンキングについては、課題発見力に関する記述が25件（表3）と最も多かった。課題発見力では、【医療知識や対人関係など実践力をもった医療従事者をを目指す】【人間を理解すること、患者さんの生活のすべてを考えて支援していく力を身につける】とし、人を支える知識や技術の修得とし、【看護は生活の支援なので、自分の生活からも学びを得る】などとして、自身の人としての成長が課題であると自己分析していた。計画力では、【医療福祉に特化した大学でキャリア形成していく】【フライトナースなど4年次にはより具体的な目標を持てるよう日々の学生生活を送る】などとして4年間の大学生活で理念や具体的な目標の達成に向けたプロセスを想定していた。創造力では、【大学の教育理念に沿った医療福祉人を目指して努力する】とし、教育理念を自己成

表4 社会人基礎力に関連した教育理念に対する思いの記述内容（1年生）

アクション	主体性	【恵まれた環境に感謝し医療福祉人として学んでいく】
		【看護だけでなく医療福祉も学んでいく】
		【学業だけでなく生活面でも自分自身に向き合っていく】
		【患者に寄り添う専門的な看護、責任を果たせる看護を志望して大学を選んだ】
	働きかけ力	【日常生活の中での人のかかわりを大切にして視野を広げていく】
		【医療系総合大学なので他学科との学びの交流をしていく】
実行力	【実習・グループ活動を通して看護師としてだけでなく、人として成長していく】	
シンキング	課題発見力	【勉強以前に自身の生活を整えた学生生活を送る】
		【看護者として、一人の人間として、まずは自身の健康と生活を管理する】
		【医療知識や対人関係など実践力をもった医療従事者をを目指す】
		【人間を理解すること、患者さんの生活のすべてを考えて支援していく力を身につける】
	計画力	【看護は生活の支援なので、自分の生活からも学びを得る】
		【医療福祉に特化した大学でキャリア形成していく】
【看護だけでなく保健も4年間で学ぶ】		
創造力	【大学の理念に沿った看護師になれるよう努力する】	
チームワーク	発信力	【大学の教育理念に沿った医療福祉人を目指して努力する】
	傾聴力	【多くの人と関わることで自身の視野をひろめ人間力をつけていく】
		【自身の考え・価値観・視野を広げるために様々な人とかわる】
	柔軟性	【人間を理解し、患者生活を考えて支援していく力を身につける】
		【技術だけでなく患者・同僚へ思いやりを持って寄り添う】
	状況把握力	【他人の立場を考慮して臨機応変に対応できる看護師を目指す】
	規律性	【医療系総合大学なので他学科との学びの交流をしていく】
		【技術だけでなく人としての内面を磨き、患者さんと向き合える医療従事者・専門職者を目指す】
ストレスコントロール力	【看護師である前に一人の社会人として成長できる大学選びをした】	
	【信頼される看護師になるために人間力を身につけ、自身の生活管理をしていく】	
	【挫折の経験を自身の成長につなげる】	
	【仲間とともに助け合いながら成長していく】	

長の指標として想定したり、【多くの人と関わることで自身の視野をひろめ人間力をつけていく】として、学生生活の中で価値観や自己の力を習熟することを想定していた。

チームワークについては、傾聴力に関する記述が12件(表3)と最も多かった。【人間を理解し、患者生活を考えて支援していく力を身につける】【技術だけでなく患者・同僚へ思いやりを持って寄り添う】とし、他者を丁寧に理解する必要性と態度を示していた。発信力では【自身の考え・価値観・視野を広げるために様々な人とかかわる】とし、自己理解を行うことで自分の意見を明確にすることを想定していた。柔軟性では、【医療系総合大学なので他学科との学びの交流をしていく】【他人の立場を考慮して臨機応変に対応できる看護師を目指す】とし、幅広く学ぶことで他者を理解して対応することを想定していた。状況把握力では、【技術だけでなく人としての内面を磨き、患者さんと向き合える医療従事者・

専門職者を目指す】とし、自己成長が患者との関係性の理解につながることを想定していた。規律性では、【信頼される看護師になるために人間力を身につけ、自身の生活管理をしていく】【看護師である前に一人の社会人として成長できる大学選びをした】とし、社会人としての成長が可能な学修環境を確保することを想定していた。ストレスコントロール力では、【挫折の経験を自身の成長につなげる】【仲間とともに助け合いながら成長していく】として、困難を仲間と協働して乗り越えることを想定していた。

このように、1年生は「人間(ひと)をつくる、体をつくる、医療福祉学をきわめる」を理念とするA大学看護系学科に入学したことに対して、社会人基礎力の12要素すべてに関連した思いを有していた。アクション(前に踏み出す力)とは、医療福祉という枠組みの中で看護をとらえ、医療系総合大学という強みを活かして横断的に視野を広げ、学業の

表5 社会人基礎力に関連した教育理念に対する思いの記述内容(4年生)

アクション	主体性	【患者指導のために自分から取り組む】 【他者理解のために思いやりや言葉選びなど自身の成長も伴うよう努力する】		
	働きかけ力	【医療福祉の幅広い視点・交流をもって多職種連携に取り組む姿勢をもつ】 【様々な状況の人とのコミュニケーション力を持つ】 【他職種の視点を理解する姿勢を持つ】 【他者・個人への理解・尊重をもってかかわる】 【共通の目標を持つ仲間と助けあう】		
		実行力	【常に学び・医療福祉を意識する環境に身を置き続けていく姿勢をもつ】	
		シンキング	課題発見力	【他者の健康だけでなく自身の健康管理・体づくりを行う】 【実践には知識だけでなく技術も伴う必要がある】 【個人を尊重することを医療福祉・多職種連携の視点で取り組む必要がある】
	計画力		【自分から取り組み学ぶ姿勢が求められる】 【多くの学びを得るために他学科や学外とのつながりを大切に連携している】	
創造力	【人工知能でも対応できない看護の奥深さや技術が必要である】 【看護だけでなく医療福祉の視点で個人の思い理解し尊重していく必要がある】			
チームワーク	発信力	【患者指導のためには説得力・根拠を大切にすることが必要である】 【個人の思いを理解し尊重するために医療福祉の幅広い視点が必要である】 【看護の学びを他学科と共有して多職種連携につなげたい】 【他者理解のためには自分の考え方を知り人間的に成長することがまず必要である】		
		傾聴力	【他職種の理解と情報共有が多職種連携につながる】 【学内外の人との交流を通して話し方・態度などのコミュニケーション力を身につけていく】 【自身の生活を通して他者の生活への理解を意識的に行う】	
			柔軟性	【医療福祉を学ぶことで医療従事者としての様々な立場・考え方を理解する】
			状況把握力	【価値観・強み・弱みなどの自己理解を深めることで他者理解につながる】 【看護職同士でも様々な考え方を持つことがあることを理解する】
	規律性	【まず挨拶が重要である】 【医療者としての話し方・態度を身につけることが人としての成長につながる】 【シューズを履き替えるなど隣接病院や実習を常に意識した環境で看護を学ぶ】 【他の看護系学校に比べて実習・臨床・感染対策に対する姿勢の違いがある】		
		ストレスコントロール力	【同じ目標をもつ仲間と助け合いながら学ぶ】 【問題解決のためには多職種連携で取り組む必要がある】	

前提として自身の生活を整える力としてとらえていた。また、シンキング（考え抜く力）とは、医療福祉人という自己成長の指標をもとに、4年間の学生生活を通して医療従事者や人間としての価値観と力を習熟していく力としてとらえていた。そして、チームワーク（チームで働く力）とは、自己と他者を丁寧に理解する姿勢をもち、社会人としての成長が可能な環境で仲間と協働していく力としてとらえていた。

### 3.3.2 社会人基礎力に関連した教育理念に対する思いの記述内容（4年生）

社会人基礎力に関連した教育理念に対する思いの記述内容（4年生）を表5に示す。

アクションについては、働きかけ力に関する記述が12件（表3）と最も多かった。働きかけ力では、【他者・個人への理解・尊重をもってかかわる】【様々な状況の人とのコミュニケーション力を持つ】ことで他者を理解・尊重する姿勢を持ち、【医療福祉の幅広い視点・交流をもって多職種連携に取り組む姿勢をもつ】など他職種・多職種を巻き込みながら問題解決に臨んでいた。主体性では、【他者理解のために思いやりや言葉選びなど自身の成長も伴うよう努力する】など、患者指導だけでなく自己成長への自律的な取り組みを行っていた。実行力では、【常に学び・医療福祉を意識する環境に身を置き続けていく姿勢をもつ】として、自己成長につながる環境づくりを行っていた。

シンキングでは、課題発見力と計画力に関する記述がともに11件（表3）と最も多かった。課題発見力では、【実践には知識だけでなく技術も伴う必要がある】【個人を尊重することを医療福祉・多職種連携の視点で取り組む必要がある】などの課題や他職種との連携上の課題を分析していた。計画力では、【多くの学びを得るために他学科や学外とのつながりを大切に連携している】など計画的に学びを深める方法として連携を重視していた。創造力では、【人工知能でも対応できない看護の奥深さや技術が必要である】【看護だけでなく医療福祉の視点で個人の思いを理解し尊重していく必要がある】など、看護と医療福祉に対する自己の価値観を持つ必要性を認識していた。

チームワークでは、状況把握力に関する記述が14件（表3）と最も多かった。状況把握力では、【価値観・強み・弱みなどの自己理解を深めることで他者理解につながる】【看護職同士でも様々な考え方を持つことがあることを理解する】とし、医療者一患者間だけでなく医療者間でも自分と周囲の人々との関係性を分析して理解することの必要性を認識して

いた。発信力では、【患者指導のためには説得力・根拠を大切にすることがある】と根拠に基づく説明・指導の必要性があること、【看護の学びを他学科と共有して多職種連携につなげたい】【個人の思いを理解し尊重するために医療福祉の幅広い視点が必要である】など医療福祉・多職種連携という広い視野に立った情報解釈と発信の必要性を認識していた。傾聴力では、【学内外の人との交流を通して話し方・態度などのコミュニケーション力を身につけていく】【自身の生活を通して他者の生活への理解を意識的に行う】など、他者の意見・思いを引き出すための方法・姿勢を自身の日常生活を通して学びを得ることを認識していた。柔軟性では、【医療福祉を学ぶことで医療従事者としての様々な立場・考え方を理解する】として、他職種の職能・立場の理解が多職種連携の前提であることを認識していた。規律性では、【まず挨拶が重要である】【医療者としての話し方・態度を身につけることが人としての成長につながる】とし、医療者としての基本的態度の修得が一人の人間としての成長にもつながること、【シューズを履き替えるなど隣接病院や実習を常に意識した環境で看護を学ぶ】【他の看護系学校に比べて実習・臨床・感染対策に対する姿勢の違いがある】など、実習病院と隣接していることを常に意識した大学独自のルールや日常的な授業のあり方が医療者としての基本的態度の修得につながっていた。ストレスコントロール力では、【同じ目標をもつ仲間と助け合いながら学ぶ】など学生同士や多職種が連携して問題に取り組んでいた。

このように、4年生は「人間（ひと）をつくる、体をつくる、医療福祉学をきわめる」を理念とするA大学看護系学科に入学したことに対して、社会人基礎力の12要素すべてに関連した思いを有していた。アクション（前に踏み出す力）とは、他者（患者と他職種）を理解・尊重する姿勢を持ち、多職種で連携できる環境に自律的に身を置き続ける力としてとらえていた。また、シンキング（考え抜く力）とは、看護と医療福祉に対する自己の価値観を持つ必要性を認識し、計画的に多職種連携の視点で自他の課題を分析する力としてとらえていた。そして、チームワーク（チームで働く力）とは、個人を尊重するために、根拠をもって他者を理解し、臨床を意識した環境とルールのもとで、多職種で助け合いながら学ぶ力としてとらえていた。

## 4. 考察

本研究は、A大学看護系学科学生を対象に社会人基礎力に関する横断的調査を行い、入学時および

卒業時の社会人基礎力の背景要因について比較検討し、今後の教育的課題を考察した。

#### 4.1 分析手法の信頼性

本研究では1年生と4年生の2群間比較において、正規性の検定結果に基づいて2つの母集団の平均値の差を比較するにあたり、Mann-WhitneyのU検定あるいはt検定を用いて有意差の有無について確認した。しかし、p値は効果の大きさを表すものではなくサンプルサイズにより影響を受けることが報告されていることから、検定方法に即したサンプルサイズを確認するとともにサンプルサイズに依存しない効果量を算出<sup>15)</sup>した。その結果、概ね統計解析を行う上でサンプルサイズは適したものであり、効果量においても適した基準を満たしていたことから、本研究で得られた結果は統計学的に支持されたと考えられる。

#### 4.2 社会人基礎力と生活習慣・生活習慣意識の学年間比較と背景要因

社会人基礎力の1年生と4年生の学年間比較を行ったところ社会人基礎力の下位尺度であるチームワークのみ有意差が認められた ( $p < .001$ )。また効果量も  $r = .39$  と中程度であることから、両群における社会人基礎力のうちチームワークのみ4年生の方が高かった。また、自由記述においては、チームワークの6要素全てにおいて、4年生は1年生よりも多くの記述がみられた (表3)。

このように、量的分析においては、チームワーク以外に1年生と4年生の間に有意差は認めなかった。しかし、1年生と4年生の社会人基礎力に関連した教育理念に対する思いの記述内容を比較すると、学生が抱く成長の枠組みが、学生自身から多職種の枠組みに拡大したこと、他者の理解・尊重のための自己理解の必要性を認識していることが示唆されたことが特徴的と考えられる。アクション (前に踏み出す力) では、1年生は医療系総合大学の強みを活かして学生自身の視野を広げることへの思いがある。一方で、4年生は就職を前にした卒業時点において、多職種連携の必要性を示すとともに、今後も他職種連携を前提とした環境で学び続けることの重要性を示す思いがみられており、多職種連携が卒業時点においても自己の成長課題を導くキーワードになっていると考えられる。また、他者 (患者と他職種) を理解・尊重する姿勢が自己成長の前提となっており、他の人間 (ひと) を理解・尊重することが、自己という人間 (ひと) を成長の前提ととらえていることが示唆された。シンキング (考え抜く力) についても、多職種連携の視点で自他の課題を分析するために、自己の価値観を明確にする必要性を認識しており、

多職種連携のための自己理解の必要性を認識していることが示唆された。そして、チームワーク (チームで働く力) については、個人 (ひと) 尊重することの重要性と、そのためにあらゆる学修をとおして人間理解を試みようとする姿勢を有していることが示唆された。1年生 (入学時点) と4年生 (卒業時点) の思いを単純に比較することはできないが、これらを促進する要因を明確にすることが教育的課題の抽出につながると考えられる。

そして、その背景として、入学時に行われる医療と福祉に関する講義が系列の医科大学と合同で実施されること、看護系学科の授業が1年次より座学だけでなく演習や臨地実習を行い、早期からグループワーク・カンファレンスが必須であること、多職種連携を意識した教育環境にあるためと考えられる。入学時からの教育理念に基づく学問領域 (医療福祉) に関する教育が、あらゆる分野の医療人として共通認識を与える基盤的教育となっており、専攻分野 (看護) の理解と主体性の形成に影響していると考えられる。A大学は、5学部17学科を有する医療系総合大学であり、世界で最初に医療福祉と健康科学を統合した医療福祉の概念を示した大学であり、医療福祉学に関する全学科共通の講義を実施するとともに、サークル活動など正課活動・課外活動をとおして他職種の職能・考え方や他職種連携の実際を学ぶ機会が多いことが背景にあると考えられる。また、【シューズを履き替えるなど隣接病院や実習を常に意識した環境で看護を学ぶ】など、常に隣接する実習病院を意識したA大学独自のルール<sup>11)</sup>が存在するが、臨地実習服の一部である白色のシューズを常時着用することで、大学生活における日常の中でも臨床を意識する環境が形成され、医療チームの一員としての意識形成につながっていると考えられる。しかし、看護系学科以外の学生でも同様のことが生じうるため、他学科との比較が必要と考えられる。

また、チームワーク以外のアクションとシンキングで有意差がみられなかった背景として、これらの要素がすでに入学時点で確立されていた可能性もある。文部科学省中央教育審議会は「人生100年時代の社会人基礎力」<sup>10)</sup>として、就学前教育 (幼稚園教育要領、保育所保育指針) から初等中等教育 (学習指導要領)、高等教育 (大学設置基準等)、さらには新卒社会人 (社会人基礎力) に至るまで、社会人基礎力の育成を目指した教育を推奨している。本研究対象者も大学入学以前から社会人基礎力の育成を前提とした教育を受けており、アクションとシンキングに関する能力を大学在学中も継続的に伸ばしていくための取り組みが必要と考えられる。特に、高大



接続の観点から高等学校での社会人基礎力教育のあり方をふまえた大学における社会人基礎力育成のあり方を検討することは、積極的選択としての大学選定につながる可能性も指摘<sup>16)</sup>されている。社会人基礎力を軸として、主体性をもって大学生活を送ることは、その後の早期の社会生活に影響を及ぼすと考えられ、入学時点・卒業時点の社会人基礎力の変化と新卒看護職の離職率との関連など、今後の調査の課題とする。本研究は、横断研究として1年生と4年生に調査を行っているため、同一集団の学年進行に伴う変化を追跡していない。今後は、同一集団に対して入学時から卒業後までの社会人基礎力について、臨地実習前後で測定するなど縦断的調査を実施することにより、専門看護職業人として社会人基礎力を育成するための効果的な看護基礎教育の方策を検討していくことが課題である。また、社会人基礎力を育成する上での関連要因を明らかにしていくことが望まれる。

## 5. 研究の限界

A大学看護系学科の1年生と4年生の社会人基礎力に関する調査を行ったが、各大学には独自の教育理念とそれに基づく教育目標が存在し、臨地実習を含めた学修環境も同一ではないことから、本研究により得られた知見を他大学看護系学科の教育に適応可能であるとは限らない。

また、本研究の調査時期は2019年から続くCOVID-19禍による緊急事態宣言およびまん延防止

等重点措置が断続的に実施された時期であるとともに、それに伴う出校停止や通常とは異なる授業形態による教育が実施された時期（with コロナ期）である。そのため、コロナ禍以前（before コロナ期）および今後のコロナ禍収束後（after コロナ期）の調査結果と単純比較することはできない。このことは、研究の限界であると同時に、本研究の結果がwith コロナ期の調査結果としての独自性を有すると考えられる。

## 6. 結論

A大学看護系学科の学生の社会人基礎力は、チームワークの項目において1年生（入学時）より4年生（卒業時）の方が有意に高かった。また、1年生と4年生のいずれも教育理念に対して社会人基礎力の12要素すべてと関連した思いを有していた。

特に、学生が抱く成長の枠組みが、学生個人から多職種連携の枠組みに拡大したこと、他者の理解・尊重のための自己理解の必要性を認識していることが示唆されたことが特徴的であり、これらを促進する要因を明確にすることが教育的課題の抽出につながると考えられる。医療系総合大学における入学時からの教育理念に基づく学問領域（医療福祉）に関する教育が、あらゆる分野の医療人として共通認識を与える基盤的教育となっており、専攻分野（看護）の理解と主体性の形成に影響している可能性が示唆された。

## 謝 辞

本研究にご協力くださったA大学看護系学科学生の皆様に心より感謝申し上げます。

## 注

†1) A大学は、大学構内では白色のシューズを学内履きとして着用するルール（白靴文化）が存在する。シューズに関して特定の銘柄・規格は指定されていないが、隣接する実習病院でも着用可能であることが推奨され、全ての学生・職員は各自で選定する。

## 文 献

- 1) 文部科学省：高等教育の将来構想に関する参考資料。  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo4/042/siryo/\\_icsFiles/afieldfile/2018/02/23/1401754\\_07.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/042/siryo/_icsFiles/afieldfile/2018/02/23/1401754_07.pdf), 2021. (2021.8.3確認)
- 2) 一般社団法人日本看護系大学協議会：2021年度会員校（大学一覧）。  
<https://www.janpu.or.jp/campaign/file/ulist.pdf>, 2021. (2021.8.3確認)
- 3) 日本看護協会広報部：2020年病院看護実態調査。  
[https://www.nurse.or.jp/up\\_pdf/20210326145700\\_f.pdf](https://www.nurse.or.jp/up_pdf/20210326145700_f.pdf), 2019. (2021.11.11確認)
- 4) 厚生労働省：看護師等学校養成所入学状況及び卒業生就業状況調査。  
<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00450141&tstat=000001022606&cycle=8&tclass1=000001123616&tclass2=000001123675&tclass3val=0>, 2018. (2021.11.11確認)

- 5) 厚生労働省：新人看護職員研修の現状について。  
<https://www.mhlw.go.jp/shingi/2009/04/dl/s0430-7b.pdf>, 2009. (2021.7.31確認)
- 6) 中央教育審議会大学分科会制度・教育部会：学士課程教育の構築に向けて。  
[https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2013/05/13/1212958\\_001.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2013/05/13/1212958_001.pdf), 2008. (2021.7.31確認)
- 7) 経済産業省：社会人基礎力。  
<https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.html>, 2006. (2015.7.31確認)
- 8) 経済産業省産業人材参事官室：社会人基礎力に関する研究会—中間取りまとめ—  
[https://www.meti.go.jp/committee/kenkyukai/sansei/jinzairyoku/jinzaizou\\_wg/pdf/001\\_s01\\_00.pdf](https://www.meti.go.jp/committee/kenkyukai/sansei/jinzairyoku/jinzaizou_wg/pdf/001_s01_00.pdf), 2006. (2021.7.31確認)
- 9) 経済産業省：大学生の「社会人観」の把握と「社会人基礎力」の認知度向上実証に関する調査。  
<https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/3518969/www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/shakaijinkan.pdf>, 2010. (2021.7.31確認)
- 10) 経済産業省：「我が国産業における人材力強化に向けた研究会」報告書。  
[https://www.meti.go.jp/report/whitepaper/data/pdf/20180319001\\_1.pdf](https://www.meti.go.jp/report/whitepaper/data/pdf/20180319001_1.pdf), 2018. (2021.8.3確認)
- 11) 北島洋子, 細田泰子, 星和美：看護系大学生の社会人基礎力の構成要素と属性による相違の検討. 大阪府立大学看護学部紀要, 17(1), 13-23, 2011.
- 12) 水本篤, 竹内理：研究論文における効果量の報告のために—基礎的概念と注意点—. 英語教育研究, 31, 57-66, 2008.
- 13) Faul F, Erdfelder E, Lang AG and Buchner A : G\*Power 3: A flexible statistical power analysis program for the social, behavioral, and biomedical sciences. *Behavior Research Methods*, 39(2), 175-191, 2007.
- 14) Cohen J : A power primer. *Psychological Bulletin*, 112, 155-159, 1992.
- 15) 鈴川由美, 豊田秀樹：心理学研究における効果量・検定力・必要標本数の展望的事例分析. 心理学研究, 83(1), 51-63, 2012.
- 16) 頭師暢秀:産学高大連携による社会人基礎力育成法の研究—地方創生への展開可能性—. 近畿大学教育論叢, 3(2), 27-42, 2020.

(2021年11月26日受理)

## A Comparison of Fundamental Competencies for Working Persons between Freshmen and graduates of the Department of Nursing at University A

Yuji KOGA, Michiko ISHIDA, Yoko NISHIDA and Kazuko WAKAI

(Accepted Nov. 26, 2021)

**Key words** : fundamental competencies for working persons, nursing student, nursing management, university of medical welfare, multidisciplinary approach

### Abstract

The purpose of this study was to evaluate the current status of fundamental competencies for working persons between freshmen and graduates of the Department of Nursing at University A, and to identify educational issues. A total of 66 first-year (response rate of 51.2%) and 52 fourth-year (41.9%) were surveyed with a valid response rate of 92.0%. The quantitative data between the two academic years were compared using Mann Whitney's U test, and inductive analysis was performed on the qualitative free-text data. Among the component factors of fundamental competencies for working persons, there was no significant difference between Action and Thinking ( $p<.04$ ,  $r=.39$ ), and only showed a significant difference in Teamwork. In addition, as for the university's education philosophy, both the first-year and fourth-year students could relate to all 12 factors of fundamental competencies for working persons. Our findings suggested that educating students about the academic field based on the education philosophy (medical care and welfare) from the point of admission delivers them with fundamental education that provides the common knowledge needed as a well-rounded medical professional, and may impact the students' understanding of their major field (nursing) and development of their self-reliance.

Correspondence to : Yuji KOGA

Department of Nursing  
Faculty of Nursing  
Kawasaki University of Medical Welfare  
288 Matsushima, Kurashiki, 701-0193, Japan  
E-mail : [y.koga@mw.kawasaki-m.ac.jp](mailto:y.koga@mw.kawasaki-m.ac.jp)  
(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.31, No.2, 2022 395 – 405)